



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	現代日本語における「『見越しの評価』を表す副詞」の研究〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	林, 恒立
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第12288号
Issue Date	2016-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61546
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Hengli_Lin_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）

氏名：林 恒立

学位論文題名

現代日本語における「『見越しの評価』を表す副詞」の研究

本研究の目的は、渡辺（1980）がその重要性を指摘した、話者の評価（見越しの評価）を表す日本語の副詞の性質を明らかにすることである。本研究では、この一群の副詞のうち、特に「基本的に複文で使用されるという構文上の制約」を持つ副詞に考察の範囲を限って、さらにその中から比較的良好に研究されている「せっかく」「なまじ」「あまり（述語の肯定形と共に使われるもの）」及び、これまで気づかれていなかった「ただでさえ」をそれに加えた4つの副詞を対象として考察し、それぞれの副詞の構文的特徴と意味的特徴を記述し、比較することによって、「見越しの評価」を表す副詞が共有する中核的な性質と個々の副詞によって異なる性質を明らかにした。

まず、第1章では、本研究の背景と考察の対象を明確にし、最後に本研究の構成を説明した。

続いて第2章では、現代日本語の副詞の研究史を概観し、その中に「見越しの評価」を表す副詞—特に「せっかく」—の研究を位置づけた。そして、この副詞のこれまでの研究に3つの問題点があることを指摘した。まず、第一に、「見越しの評価」についての議論が不足していること、第二に「見越しの評価」を表す副詞についてのデータが十分に収集されていないこと、第三に、この一群の副詞の体系的な比較が行われておらず、その共通する中核的な性質や個々の副詞で異なる性質が明確にされていないことの3つである。

第3章では、2章で指摘した2つ目の問題点に関連して、まず従来の研究で用いられていた方法論についての考察を行った。特に、これまでの日本語の副詞の研究で用いられていたデータ収集への2つのアプローチ—内省と作例を用いたアプローチとコーパスを使用するアプローチ—の妥当性と問題点について論じ、この2つのアプローチを併用することが望ましいという結論を得た。この結論に基づいて本研究では、内省と作例に加えて、コーパスを用いることによって「見越しの評価」の副詞に関するデータを収集し、補うことによって上記の見越しの評価を表す4つの副詞の分析を行った。

第4章から第7章までは「見越しの評価」を表す4つの副詞の構文的特徴と意味的特徴の分析である。まず、第4章では、「見越しの評価」を表す副詞の中で最もよく研究されている「せっかく」について考察し、その構文的特徴と意味的特徴について論じた。構文的特徴としては、まず、上で述べたように「せっかく」は「従属節—主節」という構造を持つ複文の従属節に現れ、主文や単文には現れない。そして、従属節末に現れる接続形式「のに」（順接用法）や「（の）だから」（逆接用法）を典型的な用法とすることが示された。さらに、このような接続形式を伴わない「圧縮用法」や「体言止めの文」や見せかけの単文で一旦途切れる「破格用法」も観察されたが、これらは、複文の構造に復元可能であることが論じられた。一方、意味的特徴としては、まず、「せっかく」が現れる従属節の述語として基本的に「動作性述語」を要求

することが論じられた。次に、「せっかく」の使用には、それが生起する従属節が表す命題が「既定性」という意味的特徴を持つことを要求するという制約があり、このため、既定条件を表す「なら」節では使用できるが、仮定条件を表す「たら」「ば」「と」節では使用できないことが示された。最後に、「せっかく」は、前件（話者が価値があると評価する命題）のみで完結することができず、後件（その価値を完全なものにすると見越された命題）との意味的関係を要求するという性質を持ち、前件となる命題は、話者にとって価値のある事態と解釈することが出来る場合に使用可能であることが論じられた。これに続く3つの章ではこの「せっかく」の分析を基準として残りの3つの副詞の分析が行われ、その構文的特徴と意味的特徴が比較された。

第5章では、従来の研究では「せっかく」と同様に陳述副詞と分類されてきた「なまじ」の構文的特徴と意味的特徴が分析された。まず、構文的特徴として「なまじ」も複文の構造を要求し、従属節に生起することが示された。しかし、「せっかく」とは異なり、従属節末に現れる接続形式には、順接的な因果関係を表すものに加えて、「たら」「ば」「と」のように、条件を表すものも観察されることが示された。また、接続の形式を伴わない「圧縮用法」も見られることが示された。一方、意味的特徴としては、「なまじ」は基本的に「動作」とその結果生じた状態や所有、保持などの人為現象を表す述語を修飾することが論じられた。従属節の「既定性」に関しては、接続形式が示しているように、「せっかく」と異なり、「なまじ」は条件節に現れることが観察され、その解釈が論じられた。最後に、「なまじ」は小さなプラスの事態と評価される前件と前件に相反するマイナスの事態を表すと見越して評価される後件という意味関係を持つことが論じられた。

第6章では、従来の研究では、程度副詞として分類されてきた「あまり（述語の肯定形と共に使われるもの）」の構文的特徴と意味的特徴が論じられた。構文的特徴としては、「あまり」もまた複文の構造を要求し、従属節に生起するが、従属節末に現れる接続形式には、「から／ので」など順接的な因果関係を表すものに加えて、「と」のように、条件を表すものがあることも示された。また「圧縮用法」も観察された。意味的特徴としては、「あまり」は、「状態性」の述語を要求するが、これは程度副詞として性質を持つためであることが論じられた。既定性に関しては、基本的に既定性を持つ従属節と共起し、「なまじ」と同様に、「たら」「ば」「と」のような条件節にも現れるが、その場合は従属節と主節との間に「自然的・必然的帰結」の関係があることが論じられた。最後に「あまり」は、前件の事態が度を超えると、必然的にマイナスの事態(後件)にいたると話者が見越して評価するという意味関係を持つことが論じられた。

第7章では、これまで気づかれていなかったこの類の副詞である「ただでさえ」の分析が示された。まず、構文的特徴として、「ただでさえ」も、複文の従属節に生起し、主文や単文には生起しないという特徴を持ち、接続形式としては「せっかく」と同様に「順接用法」と「逆接用法」を取ることが論じられた。さらに、「圧縮用法」と「破格用法」がともに観察されることが示された。意味的特徴としては、従属節は状態を表す形容詞や名詞のような述語でなければならず、したがって動詞述語の場合には、単なる動作ではなく、状態の説明がなければならないことが示され、この特徴は、「ただでさえ」が程度副詞の性質を持つためであることが論じられた。さらに「ただでさえ」は、条件節には決して生起せず、従属節の完全な「既定性」を要求することが示された。最後に、「ただでさえ」が修飾するマイナス（まれにプラス）の前件の事態が表す状態が、後件では、さらに進んだ状態に至るかもしれないあるいは至ってしまったという話者の見越しの評価や気持ちを表すことが論じられた。

最後に第8章では、以上の各章の分析で得られた副詞の特徴をまとめ、「見越しの評価」を表す副詞の特徴を整理し、残された課題と今後の研究の展望を説明した。